
丘の上のお屋敷は

春乃苑香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

丘の上のお屋敷は

【Nコード】

N9403H

【作者名】

春乃苑香

【あらすじ】

私は丘の上のお屋敷に仕えるメイド。今日、夫が死んだ。泣き崩れる私に奥さまは優しく言う。心配ないよ。

「彼女だけは」

うるさい。何を言ってるのだろう、この男は。

「彼女だけは取らないでくれ」

どうして私を責める目で見るの。私が何をしたらって言うの。

「僕から取らないでくれ」

「唯一の救いなんだ」

分かってる。

彼女をあなたからは奪わない。

そう。彼女からあなたを奪うの。

彼女が泣いている。

「夫が・・・夫が死んだのです」

「そう。かわいそうに」

「奥さま、私はどうしたら良いのでしょうか」

「頑張つて生きることです。あなたのご主人もそれを望んでいらつしやるはずよ」

彼女はまだ泣いている。ほんとに泣き虫なんだから。

彼女の顎を掴んでこちらを向かせる。泣き腫らした目が大きく見開かれる。

「女ひとりでは心細いでしょう」

「そうだ。ここには部屋も沢山あることだし、ここに住めばいいわ」
彼女はひくつと嗚咽をもらして、息をととのえながら答える。

「でも・・・そんな。悪いです。奥様にそこまでの迷惑、かけられません。」

こんな時まで遠慮しちゃって可愛い人。どこまでも私に甘えてくれていいのに。

「遠慮することないわ。夜遅くに一人で帰られる方が私は心配だわ」

そう。あなたは一生、私の屋敷で暮らせばいいのよ。

夫が死んだ。優しい人だった。

夫はコツクだった。

その夫がなぜか、毒にあたって死んだ。

葬式にはたくさんの人が来てくれて、夫の人柄を偲ばせた。

そして、それは私を余計、悲しくさせた。

あなたは、どうして私を一人にしたの。

奥さまが言う。

「大丈夫よ。あなたには私がついてる」

「はい。奥さま。」

奥さまが微笑む。

その美しさに私は息をのむ。

失礼だと思いつつ、奥さまから目が離せない。

「のどが渴いたわ。お茶を淹れてきて」

「かしこまりました」

もう一度、奥さまが微笑む。

奥さまの手が私の頭を、顔を撫でる。

「大丈夫か」

ヨセフ。

「ええ。ありがとう」

「熱いから、気をつけて」

夫が死んで、3年が経った。

ヨセフは夫の後に入ってきたコックだ。

夫より、料理の腕はいいらしい。

ヨセフの料理を食べたことがないから、私は知らない。

ヨセフはよく気が利く。

ヨセフが私に微笑みを向ける。

ヨセフの心を知らないわけではない。

でも、私は微笑み返さない。

ヨセフは優しい。

そう。夫のように。

だから、私はヨセフに何も返さない。

ヨセフが死んだ。

私は奥さまの部屋をノックする。

「奥さま、ヨセフが死にました」

「そう。かわいいそうに」

「こちらへ。いらっしやい。」

「はい。奥さま」

私は奥さまの足元に跪く。

「私がいるわ」

「はい。私には奥さまがいらっしやいます」

「ずっとここに居ていいのよ」

「はい。奥さま」

奥さまの手が私の頭を撫でる。

もう気づいている。私は奥さまから逃げられない。
いつか、私は奥さまに殺されるだろう。
でも、もう他に道はない。

なぜ、私は血を流して、死にかけているのだろう。

「君は遺体さえ確認しなかったな」

ヨセフ。

生きてた。

「どうしたんだ？不思議そうな顔をしているぞ」

「君を殺すのはお門違いだって？？そう思ってるんだろ？？」

「あの女への一番の復讐は、お前を殺すことだ」

あの女？誰のことだろう。

「知ってるか。お前が死ねば、お前はあの夫と葬られるんだ」

ああ。そうだ。私は夫と同じお墓に入るだろう。

この人は何が言いたいのだろう。

「もう彼女には触れられない。遠い所へお前は行くんだ」

「知ってたか。俺はお前を救おうなんて最初から思ってたの
さ」

「俺はあいつをガキの頃から知ってるが、あいつは昔からいい奴だ
った」

「なのに、お前はあいつより、あんな女に媚びへつらって」

「俺はお前も許さない」

「もちろん、あいつを破滅に追い込んだ、あの女もな」

ヨセフの声が頭の中でグァングァン響いてる。
うるさいなあ。

静かにしてくれないかな。

昔々。

丘の上の大きなお屋敷に、女がひとり住んでいた。

そこで、一人のメイドが死んだ。

屋敷の女主人はたいそう悲しみ、彼女の棺に涙を落とした。
人々は使用人を思う女主人の優しさに感動した。

これは遠い遠い、昔の話。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9403h/>

丘の上のお屋敷は

2010年10月8日22時18分発行